

されたものである。そして現存する版本は程度の差こそあれ、誤字・字句の変動が一樣に多い。江戸時代には幾種かの校勘された刊本もあるが、これも十分なものではない。『金匱要略』は今後より多くの正確な資料による校勘が、必要な古典であろう。

(北里研究所付属東洋医学総合研究所・医史学研究室)

## 中国伝統医学修得学生の 漢語素養について(最終報)

小杉 順 一

### 一、研究目的

中国伝統医学の一領域である鍼灸の部門は現在漸く生理学の方法が適用され数々の実験成績が集積しつつある段階に至っているが、それらを総説し、体系づける作業にはまだしばらく時間が必要であり、かつ新しい立場に視点をすえた思考方法の確立が求められる。

鍼灸の治効機序における未知の分野に対しては、充分計画された着実な実験データの収集・分類と同時に、過去の長い経験の積み重ねである古典の正確な読解と歴史の変遷過程でのその位置づけが重要と思われる。

これらの作業は、専門的訓練で養成された人々の責任に委ねることが当然ではあるが、中国伝統医学の実践に携わる人々は、医療の社会的責任を分担するという意味におい

て、基礎的な知識の理解は共有することが望ましいと考えられる。

戦後生まれの世代にとっては中国文化の世界は、はるかに遠い存在に思える。江戸期の医学者が漢字を自在に操り、自己の思想を展開したことを同国の先人の業とは考えにくい状態に置かれている。

このような現状では過去の自国の医師の著述さえも正しく理解できるか、それら貴重な情報を有効に活用できるかは、はなはだ疑問とせざるを得ない。さらに、過去と現在の思考方法の異同を明確に把握せねば、古典に埋もれている未来に利用できるであろう旧くて新しい視座を定めることも不可能であろう。思想は言葉により展開されることより、現在、中国伝統医学を修得している学生がどの程度の漢語素養を有しているかを調査して未来を占うこととした。

## 二、研究方法

この調査は過去二回、作製したアンケート用紙により、一昨年第一学年を対象とし、昨年第三学年を対象とし行われた。

同一学年内での分析、第一学年と第三学年との比較が行われ、結果として、

1 素養としての読解、訓読、造字、思想、歴史、文学等の平易な知識は、かなりの程度有しており、四〇歳以上が四〇歳以下に比較して優れている。また、第三学年が第一学年に比して知識を多く持っていた。

2 教育で取り上げられた範囲は当然のことながらよく理解されていたが、単なる記憶に止まっており、消極的な適応がなされた例も見受けられ、理解するという態度の涵養が望まれる。

3 さらに知識の質については、例えば、呉音、漢音とすることは第三学年の方がよく知っていたが、具体的な文字については両学年に差がない。あるいは象形・指事等の造字法についてもなら差が認められなかった。

4 儒教については、第三学年がよく回答していたが、これも表面的知識に終始し、内容が伴わなかった。

5 「気」については、様々な理解があり、アル・ナイという存在論的理解、エネルギー・精神力等と言換える解積的理解、自分で知ろうとする体験的理解などがみられ

た。しかし、両学年を通じて、中国伝統思想である理気二元論、さらにその発展した気一元論に言及する学生が一人として見当らなかつたことは興味深い。などであつた。

今回、第一回調査時に第一学年であつた学生が第三学年となつたに当り、同一のアンケート調査を施行し、専門的な教育課程においてどのような変化を被つたかを知ることとした。

調査方法は、第三学年を対象とし、全数、自記式として  
1 年齢、2 性別、3 最終学歴、4 有する知識の程度の自己評価、5 中国文化に対する興味の有無、を設けた。

調査項目として

1 漢字に対する理解。特に経穴名と常用漢字表との関連において。  
2 漢文に対する理解。特に訓読法と現代語との関連において。  
3 思想に対する理解。  
4 歴史に対する理解。  
5 文学に対する理解。

6 儒教に対する反応。気に対する理解について、を設けた。

結果、および考察については、なるべく正確な資料の入手が望まれたため、一応の教育課程が終了するのを待って一二月下旬に調査を行ったので、現在分析中である。今回は最終報であり全体としての総括も行ってみたいと考える。

(東京鍼灸柔整専門学校 筑波大学理療科教員養成施設)